

天国旅券

松本 章宏



HEAVEN
PASSPORT



天国旅券

松本 章宏



HEAVEN
PASSPORT



天国旅券

この小さな冊子をお手に取っていただきありがとうございます。

キリスト教に興味があるのだけれど、

どのような教えが分からない。

分からないからちょっと怖い。

そんな方に優しい言葉でキリスト教の牧師が解説します。

海外旅行へ行くためには、パスポートが必要です。

天国へ行くためにも、パスポートが必要なことをご存知でしょうか？

そのパスポートとは「福音の3要素を信じる」ことです。

読み進めていただくとその中身が見えてきます。

この冊子を読み終えた後、あなたが天国へのパスポートを

お受け取りになりますようお祈りしています。

目 次

天国旅券

第一章 あなたにもある罪の借金 一人は何から「救われる」のか	4
第二章 罪の借金から解き放たれる方法 —キリストの十字架と復活—	12
第三章 天国に行くために信じる3つのこと —福音の3要素—	21
お祈り	30
旅券署名	

あなたにもある罪の借金

- 人は何から「救われる」のか -



このQRコードをスキャンして動画で観てみる

キリスト教ではよく「救われる」という表現をします。人は何から救われるのでしょうか。どういう意味でこの言葉を使うのでしょうか。

一般的には「私は悩みがあったけれども、それが解決して救われた」というように用いられることが多いと思います。しかし、聖書の中では、この言葉はとても厳粛な意味で使われているのです。少し難しい言葉ですが、このテーマを「救済論」と言います。この小さな冊子があなたの手に届いていることには大きな意味があると思います。今日はちょっと立ち止まって、この「救われる」ということについてご一緒に考えていただければ幸いです。

聖書で「救われる」というとき、それは「神の永遠の刑罰」からの救いを意味します。神の永遠の刑罰から救われたらどうなるのかというと、永遠の命を持つことができます。つまり天国に行けるということです。ですからキリスト教で「救われる」というのは「天国に行ける」と同義語なのです。

では、誰が救われるのでしょうか。誰が天国に行けるのでしょうか。あなたはどう思われますか。一般的にこの質問をすると「良い人が天国に行ける」というような答えが返ってきます。良い人。ちょっと曖昧な言葉です。良い人の基準とはなん

でしょう。では、あなたは良い人ですか。あなたは間違いなく天国に行けますか。「そんなこと死んでみないとわからない」なんて悲しいことを言わないでください。天国に行けるかどうか分からないまま生きていくのは辛いことです。ぜひ今日「私は救われた！死んだら天国に行けるのだ！」という確信をつかんでいただきたいと思います。

良い人ということを考えてときに、私たちは自分自身のことを「うーんまあギリギリそのカテゴリーに入るかな」と思いがちだと思います。なぜなら私たちは往々にして自分に甘く、他人に厳しいからです。

だから他人に対して「あの人が天国に行けるわけじゃない。あんな人が天国に行ったら天国が天国じゃなくなるよ」と言い、自分に対しては完全とは言えないまでも、「まああの人よりはましだし、神様はなんとか入れてくれるでしょう」という風に思ってしまうのではないのでしょうか。でも、本当にそれで大丈夫でしょうか。

新約聖書の中に「ローマ人への手紙」という書簡があります。パウロが書いた16の章からなる手紙です。パウロはその中で1章から8章までこの「救い」というテーマについて丹念に語っているのですが、「救い」の本論に入る前に、彼はまず徹底

的に「罪」について語っています。「私たちは罪人である」ということを、読んでいて辛くなるくらい書くのです。そして彼は一つの結論を出します。

「義人はいない。一人もいない。」

ローマ人への手紙 3章10節

義人というのは、「正しい人」という意味です。つまり正しい人はいない。罪のない人はいない。一人もいない。どんなに立派に見えたとしても、人間には必ず罪がある。だからすべての人は救われる必要があるのだとパウロは言うのです。

なぜ彼は「救い」について説明するとき、最初にこれほど徹底的に「罪」について語るのでしょうか。なぜなら、人は自分に罪があるということを認めなければ、「私は救われる必要がある」ということを考えないからです。そして、救いを求めることすらしないまま死を迎えることになるからです。だから、まず自分に罪があることを認めること。このままだとまずいということに気が付くこと。じゃあ私はどうすれば救われるのだろうかと考えること。自分のこととして問題意識を持つことが大切なのです。

聖書はこの「罪」というものを、多くの箇所ですべて「借金」という言葉で表現しています。例えばよく知られている「主の祈り」は、古い訳にはこう書かれています：

我らに罪を犯すものを我らが赦ゆるすごとく
我らの罪をも赦したまえ

これはマタイの福音書6章12節に出てくる祈りなのですが、現代の聖書ではこう訳されています：

私たちの負い目をお赦してください。
私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦します。

新しい訳では、「負い目」という言葉が使われています。この負い目というのは、負債のことです。そして負債とは借金です。罪は借金なのですね。誰かに対して私が罪を犯したら、その人に対して借金を負っている。その借金は当然返さなければならない。償いをしなければならないのです。そしてすべての罪は、私たちが造られた神に対するものです。私たち人間は神に対して借金を負っている。その借金は必ず返済されなければ

ならない。しかし問題は、自分がどれくらいの罪の借金を神に対して負っているのかということ、ほとんどの人は知らないということです。そして勝手に「まあ500万円くらいかな。なんとか頑張れば返せるかな」くらいに私たちは思っているものなのです。

イエス・キリストはある時、たとえ話の中で私たちの罪の大きさについて具体的に語られました。それは、マタイの福音書の18章23節以降に書かれているたとえ話です。ある王様がしもべたちにお金を貸していました。そしてその返済期限が来た時に「さあ返しなさい。清算をしよう」という風に物語が始まります。

**清算が始まると、まず一万タラントの負債のある者が、
王のところに連れて来られた。**

マタイ18章24節

さあ借金の額が具体的に出てきました。1万タラントです。でも私たちは、タラントがどれくらいの金額なのか分らないですよ。このギリシャ語のタラントという言葉は、今日の英語の「タレント」の語源になっている言葉です。ものすごく大き

な金額なのです。1タラントは6,000デナリもあるのです。と言ってもまだ分からないですね。1デナリがどれくらい分からない。

私は以前インドネシアに住んでいました。インドネシアではルピアという貨幣が使われていますが、「私は100万ルピア持っています」と言ったらどれくらいに感じますか。当時100万ルピアというと大体1万円です。1ルピアがどれくらいなのかが分からないと私がどれくらい持っているのが分からないですよ。先ほど出てきた1タラントは6,000デナリ。じゃあ1デナリはいくらでしょうか。これは労働者が1日一生懸命働いた結果得られる賃金の額です。今日、日本で朝から晩まで一生懸命働いて、帰りにいくらもらえるでしょうか。計算しやすくするために1万円としましょう。1デナリ=1万円と換算します。そうすると1タラント=6,000デナリですから6,000万円。すごいですね。でもさっきの借金の額はいくらでしたか？1万タラントでしたよね。ですから6,000億円です。皆さんいかがでしょうか。返せますか。

これがイエス・キリストがたとえ話の中でおっしゃった私たちの神に対する罪の借金の額です。今日の日本円に換算すると6,000億円。もしかしたら頑張って返しましょうと思うかもし

れません。しかし1日いくら返せるかと言ったら1デナリずつ。つまり1万円です。毎日一生懸命善行を積むことによって毎日1万円ずつ返して行って、6,000億円返すのにどれくらいの時間がかかるでしょうか。電卓を叩いてみました。16万年です。私たちが仮に80歳まで生きるとしても、2,000回の人生を繰り返さなければ返せない。いや2,000回も人生を繰り返すと、またそれだけ罪の借金も増えていきますね。つまりこれは6,000億円という具体的な数字というよりも、私たちがどんなに頑張っても自分の善行によっては罪の借金を返済することはできない、というたとえ話であることが分かります。私たちの神に対する罪の借金は、返済不可能だということです。ではどうすればいいのでしょうか。返済することが不可能だったら誰も救われないのでしょうか。どうすればこのような状態から罪の借金を返済することができるのでしょうか。つまり、私たちはどうすれば救われることができるのでしょうか。

罪の借金から解き放たれる方法

- キリストの十字架と復活 -



このQRコードをスキャンして動画で観てみる

「自分の犯した罪よりももっと多くの善行を積めば私の罪は赦されて救われる」というのが、一般的に考えられる救いだと思います。しかしそうするためには、まず自分の罪がどれくらいであるかを知らなければなりません。聖書は、この罪という概念を「借金」で説明しているとお伝えしました。そして私たちの罪の借金は返済不可能な額であるということが例え話を通して語られていました。「では、誰も救われないのか。誰一人天国に行くことはできないのか」という疑問が起こりますね。あの例え話の続きを読み進めましょう。マタイの18章27節です。当然そのしもべは返済できなかったのですが、主人はそのしもべに対してどういう態度を取ったでしょうか。

家来の主君はかわいそうに思って彼を赦し、
負債を免除してやった。

さらっととんでもないことが書かれています。この王様は、6,000億円という大金を免除してやったというのです。そんなに簡単に免除していいのかという気持ちになりますね。「神様、そんなに簡単に私たちの罪を赦しちゃっていいのですか。あなたはそんなにいい加減な方なんですか」と思ってしまうか

もしれません。いいえ、赦しとはそんなに簡単に、その時の王様の気分で与えられるものでは決してありません。赦しを得るためには、それだけの代価が必要です。

ここで、キリスト教の信仰の要（かなめ）となるイエス・キリストの十字架の御業が必要になります。神様は、自分の罪の借金を返済できないで困っている私たち一人一人を救うために、ご自身のひとり子であるイエス・キリストをこの地上に送ってくださったのです。

この方は、私たちの罪の借金の肩代わりをするために来られたわけですから、この方ご自身が罪を持っていたらそんな資格はなくなってしまいます。ですから、誕生の時から特別でした。聞いたことがあるでしょうか。処女降誕です。処女マリアを通してイエス・キリストはお生まれになった。なぜ処女でなければならなかったのかというと、普通の方法で生まれるなら、罪の性質を持って生まれてくることになってしまうからです。これを難しい言葉で「原罪」と言います。イエス・キリストには原罪があってはならない。全く罪なきお方として生まれたのです。罪無き方として生まれ、一生の間罪を犯さないで通されました。「義人はいない。一人もない」というローマ3章の言葉を冒頭でご紹介しましたが、たった一人だけ罪のないお方がいる

のです。それがイエス・キリストでした。この方は1つの罪も犯すことがなかったのです。つまり6,000億円の罪の借金を負っていないということです。だから私たちの身代わりに返済することができる資格を持っている方であると言えるのです。

罪の借金を全く負っていないにもかかわらず、イエス・キリストは十字架にかかりました。キリストの十字架は自分で何か悪いことをした結果の十字架でないことは明らかです。それは、返せない罪を負った私たちを救うための身代わりの死でした。キリストは、あの金曜日の午前9時に十字架につけられ、午後3時に息を引き取られる6時間の間に、合計7つの言葉を語られたという記録が聖書の中に残されています。

一般の人でも死ぬ間際に残した言葉を「辞世の句」と言って、気になるものです。「あの人死ぬ間際に何言ったの?」「こういう言葉を残して死んだんだよ」という話には興味をそそられます。一般の人でも貴重だと感じる言葉であるとするならばなおさら、イエス・キリストが息を引き取られるまでの6時間の間に語られた言葉というのは貴重だと思います。

特に息を引き取る直前に語られた言葉。これは興味がありますね。7番目の一番最後に語られた言葉は、

「父よ、わたしの霊をあなたの御手に委ねます。」

ルカ23章46節

という言葉でした。この言葉をもって息を引き取られたと書いてあります。ではその直前6番目の言葉は何でしょうか？それが書かれているのがヨハネの福音書19章30節です。

イエスは酸いぶどう酒を受けると、「完了した」と言われた。

そして、頭を垂れて、霊をお渡しになった。

これが6番目の言葉です。その直前の5番目の言葉は

「わたしは渇く」

という言葉でした。その時キリストは、ローマの兵士が差し出した酸いぶどう酒を飲みました。なぜなら、渴いたまま次の言葉を発すると声がかすれて聞こえないかもしれない。次に発する言葉はものすごく重要だから、皆に聞かれなければならない。そう思って酸いぶどう酒を飲み、喉を潤し、そして発せられた言葉が、

「完了した」

という言葉でありました。

日本語で「完了した」、英語で「It is finished」、ギリシャ語では「テテレスタイ」という言葉です。今日ぜひ一つギリシャ語を覚えてください。「テテレスタイ」

これは確かに「完了した」という意味なのですが、長年の研究からもう少し深い意味があることが分かってきました。数十年前でしょうか。ローマ時代の遺跡を発掘していましたら、おそらく金貸し業者の事務所があったと思われるところから、パピルスの手紙が出てきました。その一枚一枚に「テテレスタイ」

「テテレスタイ」「テテレスタイ」と書かれていました。「あれ、テテレスタイといえば、イエス・キリストが十字架上で6番目に語られた言葉ではないか!？」と気がついた学者たちがいたのです。つまり、金貸し業者の事務所という背景で、もう少し厳密に意味を考慮すると、「借金の返済が完了した」という意味で使われる商業用語であったということが分かったのです。つまりイエス・キリストはあの時十字架上で「救いの御業が完了した」という意味でこの言葉を発せられたと考えてもいいのですが、もう一歩進んで言うならば「全人類の罪の借金の

返済が完了した！」という意味で「テテレスタイ！」と叫ばれたのだということが分かります。

「借金完済！」いい響きですね。あなたは借金がありますか？家のローンはありますか？最後の返済をした時の気持ちを思い浮かべると、早くそれを味わいたいと思いますね。当然借金は無い方がいいです。

イエス・キリストが私たちの代わりに払ってくださったのです。いくら払ったのですか？1人につき6,000億円です。いくら払ったら完済できるのですか？イエス・キリストはご自分の命という代価をもって私たちの罪の借金を返済してくださったのです。

「でも、本当に私たちの罪のために死なれたの？確かにイエス・キリストは心優しい人で『あなたがたのために死にますよ』と言ってくれるけれども、本当にそれが私のためであったということをどうやって証明するのですか」と皆さんはお考えになるかもしれない。

イエス・キリストはどうやって証明したのでしょうか。復活することによって証明されたのです。イエス・キリストは、突然捕らえられて十字架にかかったのではない。実は十字架の半年も前から弟子たちに再三再四「これからわたしはエルサレム

に行き捕らえられて十字架につけられる」という予告をされていたのです。でもその予告の中で必ず一言付け加えた言葉は、「しかし三日目に復活します」という言葉でした。十字架にかかる半年前に初めてこの受難予告をした時のことについて、マタイ16章21節に書かれています。

そのときからイエスは、ご自分がエルサレムに行き、
長老たち、祭司長たち、律法学者たちから多くの苦しみを受け、
殺され、三日目によみがえらなければならないことを、
弟子たちに示し始められた。

つまり「わたしは殺されるけれども三日目によみがえる。」そう幾度も言ってきたのです。それでもしよみがえらなければ「あぁ口先だけの人だったか。優しい人だったけれど我々を救う力はなかったね。」という話になります。しかし約束通り三日目に復活することによって、イエス・キリストには死を打ち破る力があることが明らかになり、あの十字架の死は確かに私たちの罪の借金返済をもらたらず力があることが証明されたのです。

イエス・キリストはあなたの罪の借金を返済するために十字架上で命を捨ててくださいました。その瞬間に全人類は皆罪赦

されて救われたのでしょうか？そうではありません。まずイエス・キリストはご自分のなすべきことを全部してくれたのです。そして今度は私たちの番です。イエス・キリストは私たち一人一人に対して「あなたの罪の借金、返済したよ。これが返済証明書です。さあ、受け取ってサインしなさい。」と差し出しているのです。それに対して「いや、自分の罪ぐらい自分で責任持ちます！」と拒絶するか「本当ですか！ありがとうございます！いただきます。サインします。」と言うか、そこに私たちの反応の分かれ道があります。

その返済証明書を受け取ってサインするとは具体的にどういうことなのでしょう。それは、「信じること」なのです。キリストは私の罪のために十字架で死んで復活してくださった。あれは私のためだったと信じて、受け入れることです。それによって私たちの罪は赦される。聖書が語る「救済論」とは何による救いか。それは、「信仰による救い」なのです。

イエス・キリストが必要な業は全部成し遂げてくださった。私たちがすることは「それは私のためでした」と信じて受け取るだけであります。今日是非「キリストの十字架と復活は私のためでした」と信じてください。信じるだけでいいのです。

天国に行くために信じる3つのこと

- 福音の3要素 -



このQRコードをスキャンして動画で観てみる

聖書の救済論は「信仰による救い」と言うことができます。この世の中にはたくさんの宗教がありますが、宗教であれば必ず救済論というものがなければなりません。この宗教では救われるためにはこうしなければならないという教えが必ずあるはずです。そして多種多様な救済論があるのですが、それを大別するならば、たった2つに分けられます。

第1の救いの方法は「業わざによる救い」です。業というのは良い業のことです。善行と言ってもいいですね。しかし宗教によってその善行が何を指すかがいろいろ違ってきます。例えばお布施をすること。例えば滝に打たれて修行をすること。そういうことが善行だと教える宗教もあれば、お祈りこそが善行だとする宗教もあります。

私はインドネシアに6年半住んでおりましたが、インドネシアでは80%の方がイスラム教を信じています。イスラム教の人は真面目です。なぜならば「業による救い」を信じていますから、「良い行い」をすることに一生懸命なのです。ではイスラム教における「良い行い」とはなんなのか。1日5回の祈りです。年に1か月間は日の出から日の入りまで何も飲み食いしない。そして、喜びを捨てると書いて「喜捨」と言うのですが、貧しい人たちに対する施しもします。さらに一生の中で一回は

メッカを巡礼する。これらを行うことによって自分は天国に行けるということを希望して生活しています。

それでも本当に自分が天国に行けるのかどうか自信がないという人たちがほとんどなのですが、確実に行ける方法があります。それはジハードにおける殉教であると言われています。ジハードというのは聖戦です。聖戦において殉教すること。ここから自爆テロという考え方が発展してきてしまったんですね。ですから宗教によって善行の意味が全然違ってくるわけです。

さあ、第1の救いの方法が「業^{わざ}による救い」であるとするならば、第2の救いの方法は「信仰による救い」です。これが聖書が主張する救済論です。

「信じるだけで救われる」ためには前提が必要ですね。「神の恵み」が先になければなりません。神様が「あなたを救うよ」という手を差し伸べてくれている恵みがあってはじめて「いただきます」という信仰が成り立つのであって、神が恵みの手を差し伸ばしてくれていないのに「信じます。信じます」と言ってもつかむものがないわけです。ですから、「神の恵み」を「私たちが信仰によって受け取る」。これは常にワンセットで出てくるわけですね。

そのことについて語られているのがエペソ人への手紙2章8節

ー9節です。とても大切な言葉ですので是非注目してください。

この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。

それは、あなたがたから出たことではなく、神の賜物です。

エペソ2章8節

神様からの恵みを信仰によって受け取ることによって救われた。だから救いの条件は「恵み」と「信仰」だけというのが聖書の主張です。

「それは、あなたがたから出たことではなく、神の賜物です。」これは神様からの贈り物だっていうのですね。贈り物っていうのはお金を払いません。そして私たちが何かしたことに對する謝礼でもありません。一方的なものなのです。

私はこのことについて高校3年生の時にイギリス人の宣教師が語ってくれたメッセージを今でも覚えています。クリスマスのメッセージでした。ここから「**GIFT**」というテーマでメッセージをしてくださいました。神様からの贈り物。それは 頭文字を取って、GIFTと書きます。誰からの贈り物でしょうか。「from **God**」(神様から)。どんな贈り物? 「**I**mportant」(とっても大切です)。じゃあその贈り物をもらったらいくら払わなき

やならないんですか？「Free」（無料です）。じゃあその贈り物をもったら私たちはどうすべきでしょうか？「Thank you」（ありがとうございますと受け取るだけでいい）というメッセージでした。

日本人というのはただで贈り物を受け取るのが苦手ですね。これをもったら何を返さなきゃならないのだろうか、という考えになってしまう。だから聖書には「幼子のようにならなければ神の国に入ることはできない」と書かれています。幼子に「これプレゼントだよ」ってあげたら、「ありがとう！！」って素直に受け取りますよね。これでいいんです。それで私たちは救われるのです。

さあ先ほどの聖書の続きを読んでみましょう。

行いによるものではありません。誰も誇るものがないためです。

エペソ2章9節

私たちはとかく行いを付け加えたがるものだと思います。私はイエス・キリストを信じました。プラスこれをしたから救われていますと言いたくなくなるのです。なぜ言いたくなるのかというと、自慢できるからです。

「私はこんなに頑張ったんですよ。あなたはまだまだですね。せいぜい頑張ってください」と優位に立ちたくなるのです。神様はそのように人が高慢になるような救い方はされません。もしそんな救いを受けた人たちが集まる教会があったら嫌な集まりですね。「これだけ私は頑張ったから救われた」ということを自慢しあっている場所。そんなところに私は行きたいとは思いません。神様が一方的に与えてくださった恵みをただ感謝して受け取った者たちの集まり。これが教会です。

しかし「信じるだけで救われるって簡単すぎない？」このような声が聞こえてきます。確かに私たちにとっては簡単なのですが、それを成し遂げてくださったイエス・キリストにとっては大変なことでした。十字架の上では3本の釘で全体重を支え、父なる神の刑罰を全てその身に受け取ってくださいました。あとは、私たちが信じるだけでよいという救いの御業をキリストは十字架の上で成し遂げてくださったのです。それなのにもし私たちが「イエス様、あなたは95%やっただけだったので残りの5%ぐらい私が頑張ります」と言うのなら、それは何か真面目な良い人であるかのように見えるかもしれないけれども、「あなたのしたことは95%止まりです」とキリストの十字架と復活に対する侮辱にもつながってしまうのです。

この方は私たちが救われるための御業を100%成し遂げてくださった。だから私たちはただ信じるだけで救われる。では、「聖書読まなくていいんですか?」「祈らなくていいんですか?」「教会に行かなくていいんですか?」こういう質問も聞こえてきそうですね。

私たちはイエス・キリストを信じただけで救われて、それでそのことがものすごく嬉しいので、もっと神様について知りたいて思って聖書を読み、もっと神様と会話をしたいと思ってお祈りをし、もっと神様を礼拝したいと思って教会に行くのです。つまり、救われるためにこれをするというのではなく、救っていただいたその喜びの心からこれをする。これがクリスチャン生活の喜びの秘訣なのです。

最後に聖書の救済論をまとめます。救いの方法とは何か?信仰です。信仰の対象とは何か?この天地万物全てを造られた真の神です。では信仰の内容とは何か?神が何をしてくださったと私は信じたら救われるのか?これを「福音の3要素」と言います。「福音」これは「幸福な音信」をくっつけて、「ふくおん」ではなく「ふくいん」と読みます。英語では、「Good News」嬉しいお知らせ。これを信じるだけであなたの罪は赦されて救われますという嬉しいお知らせです。

この福音が3つに分かりやすくまとめられているのが「福音の3要素」です。使徒パウロが第1コリント人への手紙15章の3節から4節にその3ポイントをまとめてくれました。

「私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、
私も受けたことであって、次のことです。
キリストは、聖書に書いてあるとおりに、
私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、
また、聖書に書いてあるとおりに、
三日目によみがえられたこと」

これが福音の3要素です。パウロは最も大切なこととして伝えたと書いています。聖書の中には大切なことがたくさん書かれています。有益な言葉がたくさんあります。でも最も大切なことは1つですね。それはどうすればあなたが救われるかということです。具体的に3ポイントにまとめてくれました。

1番目のポイントは「キリストは私たちの罪のために死なれた」こと。信じますか？ イエス・キリストはあなたの罪の身代わりとなって死なれたと信じますか？

2番目のポイントは「葬られた」こと。死んだのだからお墓に

入れられた。信じますか？

そして3番目のポイントは「3日目によみがえられた」こと。確かに十字架上で死に、墓に葬られた。けれども3日目に復活した。なぜなら救いの御業を完了してくださったから。この3つを信じるだけで救われるのです。

この冊子を手にして読んでくださってとても嬉しいです。ですが、私が心の底からあなたに願うただ一つのこと、あなたに救われていただきたいということです。是非、今日イエス・キリストを信じてこの救いを受け取ってください。

この3つをお信じになった方は、ご自分の口でこのようにお祈りしてください：

天のお父様

あなたは私を造り、私を愛してくださいました。

それなのに私はあなたに背を向けて、自分勝手な道を歩んできました。言葉をとおして、行いをとおして、心の中で様々な罪を犯

し、人を傷つけ、自分を傷つけてしまいました。

自分ではどうすることもできなかったこれらの罪を、

イエス・キリストが私の身代わりとなって背負って、

十字架の上で死んでくださったことを信じます。

あの十字架は私のためでした。

確かに墓に葬られましたが、3日目に復活されたことを信じます。

これほどまでのことをして私を救ってくださったこと、

命懸けで私を愛してくださいっていることを信じます。

今、私を救ってくださいありがとうございます。

イエス・キリストのお名前でお祈りします。

アーメン

今、このお祈りを祈ってくださった方、おめでとうございます！！今日、あなたは救われました。最後のページに今日の日付とあなたの氏名を記入しましょう。天国へのパスポートの完成です。あなたのこれからの人生が神様とともに歩む旅路でありますようお祈りいたします。

松本 章宏 (まつもと あきひろ)

1961年北海道出身。大学卒業後、4年間道立高校教諭。韓国とアメリカの神学校で学ぶ。札幌、ジャカルタ、シンガポールで30年間牧師として働く。

天国旅券

2021年12月25日発行

著者 松本章宏

発行 株式会社ジェネラスギバーズ

北海道札幌市北区北21条西8丁目3番8号

E-Mail gen.givers@gmail.com

©松本章宏 2021

聖書 新改訳2017 ©2017 新日本聖書刊行会

